

●高澤良一 第二句集 ももすずめ

●平成元年

読初めの今は昔の天竺部

元日の肌着ひらりと手に通す

目を皿のやうにして追ふ夕笹子

日当りが佳すぎても駄目シクラメン

鎌倉の日向をあるくかはしむも袈

梅林を歩いて見むかもう少し

かまきりの巢と云ふを見る着膨れて

もろともに路肩と崩れ犬ふぐり

猫柳一言云ひて皆触るる

咏へ性足らぬ椿のまた墮つる

手つかずの芹の森あり川向ふ¥

紋もんしろ白蝶が仏舍利塔を越えんとす

爪弾くつくしの頭よりぱと煙

九十九折木き五倍子ごばいしの上に人のこゑ

蔦の芽のあかあかおつつけ降り出さむ

おづおづと寄りまじまじと蘇枋見る

みつまたのやうに時間を使ひたし

啓蟄の足のぶつかる古机

句の誤植推量せよと亀鳴けり

ビルと云ふ直方體の夕おぼろ

山ざくから吹き割る風のいくそたび

孫ほどの破れ傘容れ破れ傘

弥次馬のやうに転がる椿見て

花冷え増上寺の此の鐘撞かば木更津まで

かるがろと昼月上げて八重櫻

雨冷えの甘茶こくりとのみほせり

偶にくる鳥があんずの花散らす

連翹の葉がちとなりぬ投票日

三極の花の空けに日の闌くる  
荒崎の雨にがうなの濡れあるく  
引く波に鹿尾菜被きて礁現る  
馬珂貝の尻の辺りが剥げゐたる  
沖波のときに牙だち花ユツカ  
警策音飛んで瑞鹿山芽吹き  
咲く桐に一瀉千里の旅ごころ  
十葉を抜き来てさつぱりしたる顔  
牡丹圖を杜若圖に掛け替へよ  
花棕櫚を仰ぎゆつたり坐りけり  
棕櫚の花黄昏長う長うせり  
たそがれの肉限可視星花くわりん  
ゆりの木の花たぶたぶと海風に  
ありきたりな色でありけり垣の薔薇  
紙兜折つてかむつてみせにけり  
梅雨に入る櫛昂然櫛儻然  
菜喰在の百姓、菜を啄む鳥を菜食いと呼べばひが梅雨入畑に現はれて  
高枝より喧嘩売るごと梅雨鴉  
鯉跳ねてどうんと梅雨の水面打つ  
梅雨湿りゴヤの巨人の黒髪も  
見つめゐる梅雨のシグナルレッドかな  
青梅のひよわきは落ち転がれる  
ゼラニウムだらだら雨に打たれをり  
夕映えを長びかせをりブラシの花  
山車倉を叩きて櫛の荒雫  
泰山木拝見磴の端借りて  
泰山木ずりおちさうな花とどめ  
雨あとの磴打ち泰山木病葉  
虎耳草石垣沿ひに風の起つ  
「附子」を観て椎のほへる戻り道

緑蔭を彼方の人も立つところ  
銭葵長けしを残り引越せる  
かなぶんの鉄砲玉に斜面畑  
犬枇杷に沖より旭駈けつけし  
崖の百合揺れゐて波浪注意報  
くろんぼと云ふ名もよけれ海の家  
高浪に茶をひいてをり海の家  
鼻先へすうつと螢臭き風  
嗚呼といふこゑにほうたる横江り  
川下の方へほうたる木を替へて  
葉つばごとむずとほたる火掴みけり  
こんもりと煽り甲斐ある櫟若葉  
若葉風立たす木\*ふうは中国産まんさく科の樹木の名をふうといふ  
薫風を捌き疲れて夕櫟  
神輿庫新樹の気宇につつまれて  
竹の葉のそそのかさるごと散りぬ  
庭の紫蘇摘み来て鯔のたたきかな  
虫喰ひの紫蘇も一緒に吹かれをり  
目に見えぬ雨にのうぜん昂れり  
間引かれてふてくされゐる西瓜玉  
滝水のぐるりと迂回せるもあり  
腹の底割りて二つの団扇かな  
手花火の煙くる部屋にシート敷く  
弟が立寄り呉れて門火焚  
門火焚く時刻そろそろ来てをりぬ  
芋殻折るひびきに迎へごころかな  
芋殻火また消え入りさうになりにけり

仏前

観自在菩薩かんじざいぼさつの蒸けたるを

躓きてゴツと夜宮の走り根鳴る

樟脳舟すぐに元気をなくしけり  
三伏の激痛に腰搦まれし  
龍淵レントゲン写真に潜む透視図医師と見て  
通院の途次のうぜんの宙ぶらりん  
幹もり赤く守一夏の木を画ける  
生ぬるき木椅子ににいにい蝉聴けり  
ずんどうの櫂に蝉の取継る  
暑にかすむ新宿が見え烏龍茶  
峯雲のよく聳つ日なり鵬を見ず  
峯雲に亀裂入ることなかりけり  
何は扱置き一杯目のビール  
鎌跡の残る草長け吹かれをり  
風と云ふ風が死にゐる大蓮田  
畳廊百日紅に突きあたる  
唐突に簾の蝉の鳴き出せり  
昼寝人かさと寝返りうちにけり  
炎帝に葡萄の種を抜かれたる  
家に入る前に夕顔垣間見て  
一興五虫譜の掘り返されてあとずさり  
シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨  
ふんばりてドウガネブイブイ露吸へり  
秋立つと丸々肥えしモモスズメ  
掘り出され団子決め込む団子虫  
朔日の風蠓螂の貌を吹く  
立ち直るいとま与へず萩へ風  
無患子の地を打つ音を聞きに來し  
秋草を折りとる音の根元より  
はんめうのふつと消えたる岩の色  
コスモスに須弥山見ゆる日もあらむ  
朝の鴟空氣震はせもう來たか

甲高く百舌鳥が雀を制しけり  
手入れせる松に根氣を問はるごと  
○△□圖判じある夜長  
露けさの出刃下げ南泉斬猫図  
宙を飛ぶ倉を目で追ふ夜の長し  
野の草を見る会葛に屯して  
かそけしや垂穂を垂穂うてる音  
犬蓼の稲田になだれ込むところ  
コスモスのそこを折れ穂高町  
林檎園脚立を夕陽あたたむる  
城垣の上より呼べる秋の鯉  
下金色の夕日に菜を間引く  
町内の二百と五人の敬老日  
くるぶしの上より刺せる秩父の蚊  
吊し柿早うつるせと秩父の日  
十夜僧すつぽりと入る傘買へり  
十夜僧ずしんずしんと廊渡る  
葉を落しずんとあかるき銀杏の樹  
そそけだち自暴自棄めく一枯木  
畑の菊こごえて朝を迎へけり  
ひもじさののつびきならぬ日暮鴟  
稲架棒の取り入れ後もふんばれり  
金賞を争ふ菊の目白押し  
福助に作れる菊に人だかり  
一文字咲きを支ふにボール紙  
盆栽の菊の松籟聞かむとす  
着膨れて遅参の弁をこもごと  
着膨れて後部座席を占めにけり  
足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日  
遅ればせながら駈け出す落葉あり

日陰りて木賊に引立てらるゝ家  
磧に沿ひあゆむ寒さも本格的  
月光のあまねく葱どきに性根入る  
すずかけの裸木季と申すべき  
閲覧室そそけ枯木の見ゆる席  
二三冊年をまたぎて本借りぬ  
床の間に積み置く本も年の内  
千両の実付きのわるき年逝かす  
熱爛こんな夜はに限ると注ぎ合ふも  
ぞろぞろと二階へ通され年忘  
前輪を後輪追へる街師走